



「ダビデが備えた五つの石」

2023年2月

聖書科 清水 担



ダビデは…川岸から滑らかな石を五つ選び、身に着けていた羊飼いの投石袋に入れ、石投げ紐を手にして、あのペリシテ人に向かって行った。

(サムエル記 上 17章40節)

ダビデが少年だった頃、ゴリアトという大男と戦った記事が聖書にあります。その中にある上記の一節に心が留まります。

敵の戦士ゴリアトと戦う決意をしたダビデは、サウル王の用意した鎧が身に合わず、剣も重すぎたため、普段の姿で、使い慣れた杖と石を投げる道具だけで、立ち向かうことにします。石を挟み込み、頭の上でグルグルと腕を回して回転させ、勢いよく石を投げる道具です。少年ながら羊飼いであったダビデは、羊を狙う獣たちと対峙し、杖と石で羊を守ってきました。

羊飼いの姿で近づくダビデをひどく罵り、侮るゴリアトに対し、ダビデは「この戦いは主のものだ」と叫び、石を飛ばします。するとその石はゴリアトの額に食い込み、彼は倒れ込んでしまうのです。これを機に、圧倒的な勝利がイスラエルにもたらされました。

さて、川辺で準備をしたダビデは「滑らかな石を五つ選んだ」と書かれています。実際にゴリアトに対して使ったのは一つだけでした。なぜ、ダビデは石を五つ用意したのでしょうか。神への信仰が十分ではなかったというのでしょうか。決してそうではないでしょう。

イスラエルの戦士たちは多くの戦いを経験してきたにもかかわらず、誰一人として、ゴリアトに相対するために立ち上がることはありませんでした。ゴリアトの提案は、全軍を代表した一対一の勝負で、負けた方の人々は奴隷となるということです。ゴリアトは身長が3mにもなる巨大な戦士です。いったい誰が国を背負って、こんな大男と戦うのでしょうか。恐れ、意気消沈しているイスラエルの民を目の当たりにし、ダビデは奮い立ち、王に「私が戦います!」と告げたのです。そこには神への確かな信仰がありました。

ゴリアトの言葉は、イスラエル軍を侮るだけでなく、神を蔑むものとダビデは考えました。体格、戦いの経験、技術、どれをとっても勝ち目がないにもかかわらず、「この戦いは主のものだ」とダビデは巨人ゴリアトに相対したのです。そして戦いの備えとして自分にできる最善を彼はしました。実際に使ったのは一つでしたが、彼は五つの滑らかな石を用意したのです。

私たちはどうでしょう。人生の歩みにおいて、「巨人に相対する」様な状況に置かれるかもしれません。いったいどのように目の前の困難を乗り越えることができるのか。客観的には完全に不利な状況。それでもそこから逃れるのではなく、誰かがやってくれるのをただ待つのもなく、自分が立ちあがる。

その時、助けを与えてくださる神に祈ることは幸いです。「困った時の神頼み」というより、「困った時にも神頼み」。普段から大きなことであれ、小さなことであれ、何かに取り組む際に神に祈り、どのように助けてくださるかを知っていることは幸いです。

そして、ダビデがしたように、最善の準備をすることが大切です。「一発で命中させる自信がある」と言って、一つだけしか石を用意しないというのはある意味、合理的でカッコいいように見えるかもしれませんが、「結局使わなかったから無駄だった」と思うかも知れない「四つの石」が、実際に使った一つ目の石を投げる時の励みとなるのです。

一人ひとりが清教学園という学び舎で過ごす日々が、「川岸で五つの石を選ぶ」時とされるように、神の助けを体験する日々とされるように祈ります。

